

## 実験的治療の福音と悲劇性についての簡単な考察 - 「レナードの朝」(1990年、米国)を観て -

浅井篤

A great boon and tragedy of experimental treatments

Atsushi ASAI

### Abstract

In this brief paper, I would discuss a great boon and tragedy of experimental treatments. Although medical experimental treatments including clinical research that involves human subjects are essential for medical progress and our happiness, innovative interventions and experimental therapies could bring about unforeseen results and have enormous impacts on those who concerned. Research ethics is undoubtedly important to protect human subjects and their relatives and it does work in many cases. It is possible, however, that tragedies unavoidably ensue. Ethical analysis regarding a movie named “Awakening” and “Charly” will reveal absurdity and sorrow in our lives.

### はじめに

この小論では人を対象にした医学研究や医学実験、実験的治療（以後、実験的治療と表記す）が、私たちの人生にもたらす大きな福音と悲劇性を少し考えてみたいと思います。今回は「レナードの朝」(1990年米国、監督：ベニー・マーシャル、制作：ウォルター・F・パークス、ローレンス・ラスター、脚本：スティーブン・ザイリアン、出演：ロバート・デ・ニーロ、ロビン・ウィリアムズ、ジュリー・カプナー他、字幕翻訳：戸田奈津子)と他の医学研究に関わる2本の映画作品を取り上げて、実験的治療が我々に与える直接的インパクトと間接的な波紋を検討してみます。数本の映画に焦点を当てて語りますが、ここで挙げられる事項は実験的治療一般に当てはまることだと思えます。

### ．「レナードの朝」のあらすじ

1969年ニューヨーク、医学部を卒業以来、研究しかしてこなかったセイヤー医師が、慢性精神神経疾患をかかえた患者が数多く収容されている病院に就職した。患者の多くは数十年にわたって、症状が改善することなく収容されていた。戸惑うセイヤー医師とすぐに慣れますと慰める看護師長。

しばらくしてセイヤー医師は、一定の刺激に反応する一群の患者の存在に気付いた。彼らは1920年代に流行した嗜眠性脳炎の後遺症のため重度の意識障害を来している患者たちだった。その中にレナード・ロウがいた。11歳で障害が出現し退学、自宅で読書しかできない生活を9年間過ごした後、20歳で入院、以来30年、母の献身的な介護にもかか

わらず全く意識障害は改善せず、全介助状態で 50 歳を迎えていた。自己意識はおそらくなく自発的な動作や行動も一切なかった。彼の内面ははっきりしないが、脳波が名前に反応した。

折しも医学の世界ではパーキンソン病治療薬として L-DOPA が開発された。パーキンソン病と嗜眠性脳炎後遺症の類似性に着目したセイヤー医師は、レナードに L-DOPA を使ってみることを思いつく。母親の同意を得て、実験的に L-DOPA 投与を開始し、200 ミリ、500 ミリ、最終的には 1000 ミリにまで投薬量を増やし、その後レナードは「目覚める」。意識障害から完全に回復し、30 年の時を越えこの世界に戻ってきた。レナードに続き、嗜眠性脳炎後遺症で意識障害状態にあった 15 人の患者にも L-DOPA が投与され、全員が回復する。やがてレナードは父親の見舞いに来ている女性に恋をし、人生を謳歌する。そして病院に対してより大きな自由を求める。しかし丁度その頃から、小さな痙攣や不随意運動、そして精神症状が現れ始めるのだった……。

### ・ 実験的治療の姿を表現する言葉

「戻りました」

この言葉は L-DOPA を投与され、意識を回復したレナードがハミリカメラ（現代のデジタルビデオカメラにあたるもの）に向かって語る言葉です。重度意識障害で（おそらく）自己意識を持たず 30 年間全介助状態で過ごしていた彼が、「この世界」つまり人々が他者と交わり、友情と恋愛を育み自由を謳歌する世界に戻ってきたのです。この言葉はまさに実験的治療がもたらす利益を表現しているといえるのではないのでしょうか。しかし実験的治療で将来の予後が全くわからないレナードに対して病院側は自由な外出を許しません。病院側の態度に彼は、

「あんた達が目覚めさせたのは人間で物じゃない」

と怒りをぶつけます。この言葉も実験的治療の本質を言い当てている気がします。治療が対象にするのはいつも感情の人間であり、感情があるからこそ他者と関係を築き、喜んだり悲しんだりすることになります。

残念なことに、レナードの病状は原因不明のまま悪化し始めます。セイヤー医師らの懸命な努力にもかかわらず、彼の緊張状態は急速に進行していきます。一時は自由な外出などの件で感情的な行き違いがありセイヤー医師を拒絶していたレナードも、身体が思うように動かなくなり「助けてくれ」と懇願します。二人の共同作業が再開し、レナードは回復前の状態に戻ってしまう恐怖や不安と戦いながらなんとか治療法を模索していきます。あらゆることが試みられたにもかかわらず、ついにレナードは植物様（嗜眠）状態に戻っ

てしまうのです。30年に比較すればほんの束の間「目覚めて」いたレナードの映像を見ながら、彼にやさしい人と評されたセイヤー医師は、

「命を与えてまた奪うのが親切な事かい？」

と理解者であり協力者である看護師長に呟くのです。レナードにとってもセイヤー医師にとっても、彼らを取り巻く人々にとっても、事の顛末は悲劇的です。

### ・同じテーマを持った映画

「レナードの朝」は、実験的薬物を使って意識障害患者レナードの回復を試みた実験的治療と彼に深く関わる人たちの悲喜交々を描いた作品でした。これとそっくりのパターンを持った映画がずっと以前に製作させています。「アルジャーノンに花束を」(1968年アメリカ、制作・監督：ラルフ・ネルソン、制作・脚本：スターリング・シリファント、出演：クリフ・ロバートソン、クレア・ブルーム他)です。この映画でもチャーリーという精神遅滞の成人患者に対して全く新しい脳手術を行い、彼の知能は天才並みになります。しかしやがて手術の効果が消失し、元通りの状態に戻っていくという悲劇を描いています。この映画に描かれる研究手順には倫理上たくさんの問題が描かれていますので後述したいと思います。

医学研究や医学実験、実験的治療に関係する映画は、SF、ホラー、実話の映画化、ドキュメンタリーなどの領域でたくさん作られてきました。簡単に思いつくだけでも、「ザ・フライ」(1986年)(自己人体実験の結果、ハエと融合してしまう主人公の末路)、「スーパーサイズ・ミー」(2004年)(マクドナルド製品だけを一ヶ月間食べ続けるという自己人体実験の実記録)、「エス」(2001年)(実話に基づいた心理学実験映画)、「フランケンシュタイン」(1994年)などが同じ仲間に入ります。

「デープ・ブルー」(1990年アメリカ、監督：レニー・ハーレン、制作：ブルース・バーマン他、脚本：ダンカン・ケネディー他、出演：サフロン・ロバーズ他、字幕翻訳：菊地浩司)も同様です。この作品では、主人公の研究責任者が、詳細はわかりませんが生きたサメの脳組織を使って認知症(老人性痴呆症)治療薬を開発する研究を海中施設で行っています。しかしなかなか思うように成果が出ず研究費が打ち切れそうになります。焦った彼女はとんでもないことをしてしまい、その結果、巨大化した脳を持ち、彼女たちを抹殺しようという明確な意思と強い欲望、そして高い知能を持つ凶暴なサメに追い回される羽目に陥ります。出資者から「サメに何をした？」と問い詰められた主人公は次のように語ります：

「だからハーバード盟約を破ったの。遺伝子治療で脳を大きくした。たんぱく質を増すために。その結果はサメは利口になった。・・・こんなことになるなんて・・・この研究で脳

の退化を一掃できたのよ」

ちなみにこれは巨大高知脳サメが暴れ、研究者仲間が殺された後の台詞です。この後出資者が食べられてしまい、最後には主人公も自己犠牲的自殺行為でサメの餌食になってしまうのでした。

### ・これらの映画が問いかけること

「レナードの朝」と「アルジャーノンに花束を」の背景はほぼ同じで 1960 年代後半から 1970 年代初頭ですが、製作された時期には 20 年以上の隔たりがあります。後者が発表された 1968 年は、ヘンリー・ビーチャーという医学研究者が非倫理的な研究に関する論文を世界で最も影響力の強い雑誌に公表からほんの 2 年後で、このあとも多くの非倫理的な医学研究が世界で行われたことが明らかになっています。1972 年には大勢の黒人梅毒患者を治療法があるにもかかわらず故意に無治療で「経過観察」とした悪名高いタスキギー事件が公となり、その反省から今でも研究倫理の基本となるベルмонт・レポートなるガイドラインが公表されました。そこで明示された基本原則は、人の尊重、患者の利益、公正の 3 つでした。また医療におけるインフォームド・コンセントの概念も 1970 年～1980 年代の医療訴訟裁判を通して確立していきます。したがって「レナードの朝」が作られた 1990 年には現在とほぼ同一の研究倫理規範が確立していたといっても大きな間違いではないでしょう。したがってかなり雰囲気は違います。

「アルジャーノンに花束を」では天涯孤独らしい主人公チャーリーの英語教師が、マウスの脳に外科的手術を施してその知能を発展させた 2 人の研究者(医学研究者と心理学者)に、是非チャーリーに実験的脳手術をしてくれと頼みます。彼女は善意から彼のことを思って手術を頼み込むわけですが、彼女は研究参加に同意する代理判断者として適切でしょうか。おそらく全くふさわしくありません。チャーリーは英語教師に薦められて手術を希望しますが、彼の知能では研究の危険や想定される害、成功率や失敗率は理解できなかったでしょう。そもそも「アルジャーノンに花束を」で悲劇が起きてしまうのは、2 人の研究者が十分長期にアルジャーノンという名前のマウスを含めた実験マウスの術後経過を観察せず、早すぎる人体実験を行ってしまったからです。マウスたちは脳手術後皆死んでしまっていました。チャーリーは天才的な知能を駆使して新たな方法を探す努力をしますが、努力の甲斐なく絶望のうちに精神遅滞状態に戻ってしまいます。したがって本作品で行われた研究の倫理的問題を要約すれば、長期的な利益と害が全くはっきりしない実験的治療を、公正な研究対象者選定を行わず、適切な代理判断者のいない知的障害者に行ってしまったことだと言えるでしょう。2006 年の生命倫理的観点から見ると、およそ 40 年前の研究手続きには大きな問題があることがわかります。

一方、「レナードの朝」は 1980 年代後半に作られ 1990 年に公開された映画ですので、お話の中でも研究実施前に医師同士が L-DOPA の作用も副作用も何もわかっていないこと、

保護者からしっかりした同意を取らなくてはならないことを確認し、かつ実験は少量のL-DOPA から徐々に増やしていくというプロセスが描かれます。すでにパーキンソン病患者に使用されていた（と思われる）薬を使用するという点でも、人に初めて新手術を（それも脳に）行う「アルジャーノンに花束を」より受け入れられやすいかと思います。しかしレナードの長期的経過を確認せずに、他の同様の疾患を持つ人々15名にL-DOPAを投与したのは、私たちが結果を知っているからかもしれませんが、早まった投与だったと言えるでしょう。レナードにとっては何も変わりませんが、15名の人たちが再び悪化して植物様状態になってしまうという恐怖を経験する事態は避けられたかもしれませんが。実際全員元の状態に戻ってしまいます。大勢の悲劇が一人の悲劇で済んだかもしれませんが。しかし彼らを経験したことが回避すべき悲劇だったかどうか、また後で考えたいと思います。

さて一般的な研究倫理のお話はこのくらいにしましょう。今回いちばん考えたいことは医学実験（または実験的治療）という行為に本質的に存在する功罪です。つまり、医学の発達をもたらす得る福音と、いくら倫理的に適切な手順を踏んで最善を尽くしても生じ得る悲劇についてです。功罪に関わるキーワードは、偶然性、藁をも縋る思い、不確実性、不可知性（人間の限界）などでしょうか。

レナードの「戻りました」という言葉に象徴されるのは実験的治療がもたらした福音です。レナードは人生を取り戻します。母親も戻ってきた息子に感激します。誰もが素晴らしいことだと思ってしまうでしょう。「アルジャーノンに花束を」のチャーリーも脳手術によって高い知能を持ち、他人からもばかにされず差別もされず恋人もでき、新たな人生が始まります。これも疑いもなく実験的治療がもたらした善いことです。「デープ・ブルー」でも脳の退化を防止しこの世から認知症を無くしたい善い動機が、研究者にルール違反を起こさせます。これは受け入れられないことですが、この実験がうまくいけば人類に非常に大きな幸福を与えたことができたでしょう。認知症患者ゼロの世界です。サメも暴れず嵐も来ず誰も死ななければ結果オーライということになったかもしれません。遺伝子操作でサメが大人しくなっていた可能性もあったのですから。

しかし実験的治療の効果は多くの場合不確実であり、結果は人間の個別性や偶然にも大きく左右されます。どんなに慎重な手順を踏んだとしても、常に初めての人体実験は存在するのです。そしてそこで偶然と不確実性と未来に対する不可知性のために悲劇が起きてしまいます。悲劇発生の可能性は先行実験や慎重な進め方で小さくすることはできます。しかしその可能性をゼロにすることはできません。「レナードの朝」のセイヤー医師は実にやさしく献身的で優秀な医師であり医学研究者です。しかし「レナードの朝」では悲劇が起きてしまいました。もちろん悲劇ではないかもしれませんが、しかし悲劇的な側面を持つことは否定できないのではないのでしょうか。レナードは植物様状態から目覚め、チャーリーは精神遅滞の状態から目覚めます。目覚めたことで多くのことを得ましたが、しかし再発の兆しが出てきてからは、再び元の状態に戻ることに對する恐怖と不安を経験しなくてはならなくなります。そしてすべてを失います。彼らと深く関わった人々も多くのも

のを失います。これは悲劇です。善意によって起きた誰も予知しえなかった悲劇です。

実験的治療や医学研究がもたらす悲劇は、藁をも縋る気持ちで医学や先端医療に奇跡を求める人間の性によっても引き起こされます。レナードの母もセイヤー医師もチャーリーもその英語教師の女性もすべて、医学に大きな期待をします。そしてその期待が実現するか裏切られるかは、まさに神のみぞ知るなのです。あることが起きる可能性が100%でなければ、その他のことが起きる可能性は常にあるのです。ですから、理由もなく病気になり常に不確実性を孕む医学に頼るしかなく、とりわけ実験的医療で不確実性が大きく将来に対する不可知性がある場合福音と悲劇は無作為に訪れるかもしれません。生命倫理的観点から言えば、この点を研究者側も研究に参加する側も十分認識する必要があるのではないのでしょうか。最善を尽くしても最悪のことが理由もなく起きる可能性がある。これも人生の姿なのではないのでしょうか。もちろん医学研究者は人生の不条理を引き合いに出す前に、患者の自発性が完全に保障された、最も危険の小さな、そして十分な手続きを経た研究実施を心がける義務があることは言うまでもありません。

さて「レナードの朝」の中で最も印象に残る言葉のひとつは、「あんた達が目覚めさせたのは人間で物じゃない」です。もちろん作中に登場する医師や看護師で彼を物扱いするようないどい人は誰ひとりいません。みんな善い人です。しかしレナードにしてみれば、せっかく「人間」の世界に戻ってきたのに、一切の行動の自由が与えられない、自分の一人の人間としての気持ちが全然わかってもらえないという気持ちがあったと思います。彼の感想は正しく、セイヤー医師以外の病院側スタッフは実験的治療で回復したばかりの患者という観点だけから彼を見ており、身体的安全の確保が第一になっていたと思います。患者の個人としての自由か、それとも患者の安全か。これは難しい自由とパターンリズムに関わる問題です。今回は問題提起だけに留めますが、医療におけるパターンリズムの問題は、排除すれば善いと簡単に割り切れない重要な問題です。しかしいずれにせよ、患者さんが研究に参加した場合、彼らは研究対象者（被験者や研究参加者、研究協力者などと呼ばれることがあります、どのような呼び方をするにしろ）となり、研究者は彼らから客観化普遍化できるデータを取るわけです。したがって彼らはある意味「対象」化され、データや数字と認識される危険性が出てきます。したがって彼のこの言葉には非常に重みがあると思います。研究者は患者の参加の自由や参加取り消しの自由はいつも考えていますが、彼らの人生における自由の重要性などは考えないものです。

もう一つ、「命を与えてまた奪うのが親切な事かい？」というセイヤー医師の発言をみてみましょう。この言葉には実験的治療が本質的に持つ悲劇性が表現されています。セイヤー医師はレナードをはじめ多数の患者を目覚めさせておきながら、再び植物様状態に陥らせてしまった自分を責めています。しかしここで注目したいことは、彼が人間の自己意識や人格を命（英語でも life）と表現していることです。命＝人格であったり、命＝自己意識がある人生であったりすることを含意しています。もちろんレナードらが植物様状態に戻ってからも、家族も関係者も医療従事者も献身的に介護するわけです。母親は全介助で自

発的行動が全くないレナードから彼の意思のサインを読み取ることができたと言います。しかしにも関わらず、可能であれば人格があり意思疎通ができることが望まれているような印象を受けました。子どもに重度意識障害があってもいい、しかし回復すればもっといいということでしょうか。この人間の人格性の問題は生命倫理領域ではパーソン論問題と呼ばれており、別の機会に述べたいと考えます。

### ・あなたはどう思いますか

「レナードの朝」は感動の名作だと思います。なぜなら人間の善いところと医学の福音が丁寧に描かれているからです。レナードと人々の関係も素晴らしいものがあります。しかし私はちょっと考えてしまいました。レナードは L-DOPA によって目覚めてはたして幸せだったのかと。結果的に短期間で植物様状態に戻ってしまったので、20歳で入院してから一度も「この世界」に戻ってこない方がレナードにとっても、母親にとっても、同じ病気をもち同じ運命を辿った人々にとっても幸せだったのではないのでしょうか。

私にははっきりわかりません。ただ彼の前の状態に戻る恐怖、彼が再び悪化していくのを否応無く見せ付けられた同一疾患の人々の不安、残される人々の悲しみと苦痛、そしてこれからも残された者が抱くであろう、叶わぬ回復への渴望を考えると、今回の実験で短期間であったとしてもレナードは多くのものを得たから幸せだったと言い切ることはできません。

それではレナードに対してはじめてから L-DOPA 投与をすべきではなかったのでしょうか。今後いっさい彼と同じような状態にある人々の改善を目指して新たな治療を試みることをやめるべきでしょうか。別の言い方をすれば、その悲劇性ゆえに実験的治療、医学実験、医学研究をすべてやめてしまうべきでしょうか。明確な理由つけはできないのですが、私にはそうは思えません。非倫理的な研究はもちろん駄目です。しかし人事を尽くした上でも生じる悲劇だけを理由に、医学の発達をもたらす大きな恩恵をすべてあきらめることは私にはできません。

あなたはどう思いますか。

### ・おわりに

「レナードの朝」は研究倫理や医学実験の功罪以外にも幾つも問題を提起してくれます。それらには医師、研究者に求められる新鮮な感受性の必要性、慣れからの無関心の恐ろしさ、医療にはお金がかかること、患者と医師が友人になってしまうことの善い点と問題点、チーム医療の大切さなどです。生命倫理研究者、医療従事者、そして医療系学生必見の作品です。